

解答

1. × 呼吸の有無を観察する時間は10秒以内。呼吸があっても1分間に10回以上なければ呼吸が不十分である。
2. ○ 口対口による人工呼吸の方法は、傷病者の鼻をつまんで空気が漏れないようにして救助者（自分）の口を大きく開けて傷病者の口を覆い、1秒かけて息を吹き込む。気道が閉塞した状態で吹き込むと、気道閉塞を起こす危険があるので注意。
3. × 効果的に圧迫するには、下が平らでかたい場所に仰向けに寝かせるのがポイント。圧迫するときは胸が4～5cm沈む強さで脊柱に向かって垂直になるようにする。
4. ○ 心肺蘇生のサイクルは救急隊の到着まで、あるいはAEDが傷病者の体に装着されるまで繰り返す。可能ならば2人以上で実施するのが望ましい。
5. × 1分間に約100回が目安、片方の手のひらの下の部分を傷病者の乳頭と乳頭を結ぶ線上の真ん中の位置に当て、その上にもう片方の手のひらを重ねて両肘を伸ばしたままに押し続ける。
6. × 電気ショック後や電気ショックは不要と判断された場合でも電極パッドを剥さずAEDの電源も入れたまますぐに胸骨圧迫を再開して心肺蘇生を続ける。
7. × 熱による組織破壊は作用時間と温度で決まり、45℃の低温熱源で1時間、70℃になると1秒で組織が破壊される。
8. × 傷が真皮層の中間まで及び、水疱ができて赤くはれ、強い痛みと灼熱感を伴うのはⅡ度熱傷。Ⅲ度は傷が皮下組織まで達し白っぽくなってただれ痛みは感じなくなる。
9. × 局所の手当は、できるだけ早く局部を冷やすことがポイント。衣服の上から熱傷をした場合は無理にははがさず、そのまま水をかけて冷却する。
10. ○ 一般にⅡ度以上の受傷面積が成人で30%以上の熱傷を重症熱傷と定義している。20%以上になると皮膚から水分が蒸発してしまい非常に危険な状態となる。

11. ○ 凍傷では、発症直後ほとんどしびれを訴え進行性に症状が悪化するのが特徴。  
温めたりこすったりせず、速やかに医療機関に搬送することが重要。
12. × 複雑骨折は折れ方が複雑なのではなく、皮膚や皮下組織などが損傷して骨の端が外に突出した状態のこと。開放骨折ともいい、細菌などに感染する可能性が高い
13. ○ 外傷を伴う場合は、傷と出血の手当を行ってから骨折の処置をして固定したらただちに医療機関に搬送する。なお整復とは骨折や脱臼を元に戻すことをいう。
14. × 骨折の疑いがある場合は、包帯は副子が動かない程度に巻き締められてはいけない。副子は骨折部の上限の関節まで固定する。
15. × 皮膚が損傷していた場合は傷と出血の手当を行うが、この際、複雑骨折で皮膚から骨が突出していても戻してはいけない。また完全骨折で変形がみられた場合も決して整復を行ってはいけない。
16. ○ 骨折に伴って神経・血管・筋肉・腱などを損傷したり、大きな骨折ではショック症状を起こすこともあるので、骨折部の手当と同時に事故者の全身状態も注意。
17. ○ 回復体位とはいわゆる横向き寝であり、一時救命措置と二次救命措置の間にとらせる姿勢である。
18. × 水泡は破ると細菌に感染しやすくなるため、できるだけ破らないようにする。
19. × 成人の場合、1分間に約100回のテンポで圧迫する。人工呼吸と胸骨圧迫の組み合わせは、人工呼吸2回を実施したあと胸骨圧迫30回、再び人工呼吸2回を1サイクルとする
20. ○ 複雑骨折は皮膚や皮下組織などが損傷して骨の端が体の外部に出ている状態。単純骨折は単に皮膚の下で骨折していること。

21. × 応急の時に1分間も観察していたのでは長すぎる。気道を確保したら10秒以内に観察し1分間に10回以上の呼吸がないと判断したら人工呼吸を行う。
22. ○ II度は水疱ができる程度なもの、I度は皮膚が痛くなり、ヒリヒリ痛む状態 III度は皮膚が深度にまで火傷になった状態のこと。
23. × AEDによる電氣的除細動を実施した場合でも、次に人工呼吸や胸骨圧迫を継続して行わなければならない。
24. × 多量出血は具体的に、成人で500cc以上のことをいう。体内の全血液量の3分の1程度が短時間に失われると出血によるショックのあと生命が危険な状態に2分の1が失われると死にいたるといわれている。
25. × 静脈性出血の血液は暗赤色。傷口からゆっくりととぎれることなく出血し出血量は比較的多いが生命にかかわる心配はほとんどない。
26. ○ 直接圧迫法は止血部にできるだけきれいなガーゼやハンカチなどを当て、強く圧迫する。関節圧迫法は動脈性出血の場合の止血法で止血部より心臓に近い部分の動脈を指で圧迫して血流を遮断する止血法。
27. × 止血帯は前腕部と下腿部の動脈性止血で直接圧迫法で止血できない時にかぎって救急要請後に最後の手段として用いる。
28. × 熱けいれんは、大量に発汗して水分と塩分が失われたところに、水分のみを補給すると血液中の塩分が低下して筋肉痛や立ちくらみが起こる熱中症である。
29. ○ 熱疲労では、頭痛・気分の不快・吐き気・嘔吐・全身倦怠感・脱力感などの症状が起こせる。手当は涼しい場所に運び、楽な姿勢で頭を低く足を高くして仰向けに寝かせること。意識があればスポーツドリンクなどで水分と塩分を補給する。
30. ○ 熱射病はIII度に分類される。体温調節が破たんして発汗が停止、顔面紅潮・意識障害・けいれん・手足の運動障害などの症状がみられ、皮膚が乾燥して体温が40℃以上に上昇する。体温を下げるために水をかけ扇風機をあてる方法もある。